



八王子盲学校だより

令和8年9月発行 第5号
東京都立八王子盲学校長 田島 由紀子



暗闇の中で見えてくるもの

校長 田島 由紀子

夏休み中、本校では、一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティと共に、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク Showcase at 八王子盲学校」を開催しました。ダイアログ・イン・ザ・ダークは、視覚障害のあるアテンドの案内のもと、光を完全に遮断した「純度 100%の暗闇」の中で過ごす体験型プログラムです。参加者たちは視覚に頼ることなく、白杖を手に、時には肩に手を置き、時には手をつなぎながら、互いの声を頼りに進みます。見える人も見えない人も同じ条件の中で過ごし、互いを支え合うことで、人とのつながりや対話の大切さを体感することができます。

私たちが普段、どれほど「見ること」に頼っているかを、この体験は改めて気付かせてくれます。そして同時に、人とつながるためには「見えること」以上に大切なものがあることも教えてくれます。

私自身も、その真っ暗な空間を体験しました。目を開けていても閉じていても変わらない暗闇の中では、自然と耳を澄ませ、相手の声に意識を向けるようになります。誰かの「大丈夫？」という一言や、「こっちだよ」という声掛けに安心し、自分もまた誰かを支えようとしてみます。見えないことへの不安がある一方で、人と人とのつながりの確かさを強く感じる時間でもありました。

暗闇の中に身を置きながら、私はふと、村上春樹の小説『ねじまき鳥クロニクル』に登場する「井戸」を思い出しました。作品の主人公はひとり、深い井戸の底へ降りていきます。そこはまさに純度 100%の暗闇であり、ひとりぼっちの主人公にとって、外界の音や光から切り離された静寂の世界であり、自分自身の心と向き合う場所です。井戸の底で主人公は、不安や喪失、そして自分でも気付かなかった思いと出会っていきます。井戸は、人が自分の内面を探るための象徴として描かれています。

ダイアログ・イン・ザ・ダークの暗闇と、この井戸には共通点があります。どちらも光のない世界です。しかし、その意味は少し異なります。

『ねじまき鳥クロニクル』の井戸は、ひとりで降りていく場所です。そこでは、自分自身の心の奥底と向き合うことが求められます。一方で、ダイアログ・イン・ザ・ダークの暗闇は、誰かと共に歩む場所です。見えないからこそ声を掛け合い、見えないからこそ相手を信頼し、見えないからこそ人とのつながりを感じることができます。井戸が「自分との対話」の場だとすれば、ダイアログ・イン・ザ・ダークは「他者との対話」の場と言えるかもしれません。

しかし、実際に体験してみて感じたのは、この二つは決して別のものではないということです。他者の声に耳を傾けるためには、まず自分自身の思い込みや先入観に気付かなければなりません。そして、自分自身を見つめ直すことで、初めて相手の立場や気持ちを想像することができるようになります。

夏休みが終わり、学校には再び幼児児童生徒たちの声が戻ってきます。久しぶりの友達との再会を楽しみにしている人もいれば、新しい学期に不安を感じている人もかもしれません。そんなときこそ、互いの声に耳を傾け、相手の気持ちを想像しながら言葉を交わしてほしいと思います。

私たちは、見えているつもりで大切なことを見落としてしまうことがあります。しかし、少し立ち止まって耳を傾けることで、新たな気づきが生まれます。自分自身の心の声に耳を傾けることも、友達や先生、家族の声に耳を傾けることも、同じように大切なことです。

ダイアログ・イン・ザ・ダークの体験は、暗闇が決して何も見えない場所ではないことを教えてくれました。むしろ私たちは、光の中で見落としていたものに気付くために、ひとときの暗闇を必要としているのかもしれません。

【 あいサポート研修会について 】

7月22日(水)、本校において「あいサポート研修会 ～あなたの知らないはちもうの世界～」を開催しました。今年度は内容を大きく見直し、視覚障害について楽しく学べる体験型イベントとして実施し、視覚障害児・者やその保護者、本校の幼児・児童・生徒や卒業生、都内盲学校、地域の学校教職員、関係機関、大学生、地域住民など76名の方々に御参加いただきました。

会場内には、視覚障害に関するさまざまな体験・展示コーナーを設置し、参加者は自由に巡りながら学びを深めました。また、スタンプラリー形式を取り入れ、体験ごとにシールを集め、全て集めた方には3Dプリンターで製作した本校マスコットキャラクター「ハッチとモーちゃん」のストラップ、または小学部で飼育しました蚕の繭で作ったお花をプレゼントしました。

さらに、盲導犬体験や視覚補助具、点字ディスプレイ、歩行支援機器の体験、福祉施設や支援機関による紹介コーナーなど、多くの外部団体の皆様にも御協力いただき、参加者にとって視覚障害への理解を深める貴重な機会となりました。

参加者アンケートでは、「様々なブースがある形で面白かった」「先生やスタッフと直接話げできた」「雰囲気明るく全体的に活気のある学校だなという印象を受けた」「工夫を凝らした展示に驚いた」「学校の取組がよく分かった」「マッサージで体が楽になった」「普段は体感できないことを感じることもできた」「来年度も開催してほしい」といった声が寄せられました。

御参加いただいた皆様ならびに御協力いただいた関係機関・団体の皆様に心より感謝申し上げます。今後も地域に開かれた学校として、視覚障害への理解啓発と地域との連携を進めてまいります。

(主幹教諭 二方 宏和)

【 幼稚部の取り組みについて 】

厳しい暑さが続いた夏休みも終わり、子供たちの元気な声が学校に戻ってまいりました。

保護者の皆様におかれましては、夏休み中もお子様の健康や生活を温かく支えていただき、ありがとうございました。

夏休みの経験を大切にしながら、二学期も一人一人の成長を丁寧に見守り、充実した学校生活につなげてまいります。

今回は、幼稚部の活動の中の一つを御紹介いたします。

幼稚部では、子供たちが野菜や食材に実際に触れ、形や大きさ、かたさ、においなどを感じる活動「触ってみよう」を行っています。この活動は、食材の名前や特徴を知り、触った食材が給食に出ることを楽しみにする中で、食育することへの関心を少しずつ広げていくことを大切にしています。年間を通して活動が企画されており、全8回に渡り、幼児が給食の調理のお手伝いの一端を担う形で食育が行われます。7月には、とうもろこしの皮むきを行いました。何枚も皮があること、実は「雌しべ」であるひげがついていることなど触ってみることで新しい感動や発見が生まれていました。

盲学校の教育において体験的な学び、触ってみて五感で感じる学びは昔から大切に行われている活動です。この活動は、都内の盲学校の幼稚部の中でも八盲オリジナルの活動ではないでしょう。

昨今では、AIを単なる便利な道具として使うだけでなく、児童生徒が自分の考えを広げたり、情報を整理したり、課題解決の手掛かりを得たりするための学習支援の一つとして活用することが期待されています。

そのような時代の中でも、昔から盲学校で大切に受け継がれてきた体験的な学び、体験から生まれる幼児・児童の感動を大切に守っていききたいと思います。



(幼・小学部主任 田中 泰美)